

「大学は学生に生計の資を得るための知識を授けるためにあるのではない。技能のすぐれた法律家・医師・技術者をつくるのがその目的でなく、有能で教養ある人間をつくるのが目的である。

人は法律家や医師である前にまず人間である。もし彼らを有能で感受性ある人間に育てるならば彼らはおのずから有能で感受性ある法律家や医師に育つであろう。

一般教育は少なくとも
人間に対して、より深い、より多様な興味を感じさせてくれるに違いない」
——J. S. ミル——

「教育において最も大事な事は、特殊な知識の習得ではなく独立に思考し判断できる一般的な能力を発達させることである。

自分の課題とつながる基本的な事柄をマスターし、他人に頼らないで独立に思考していけることを学びとった人は、自分の歩むべき道を確実に発見するだけでなく細かい知識を中心に習得した人々に較べて進歩と変化に対し、よりよく自分を適応させていくことができる。」

——A. アインシュタイン——

目 次

特集：「一般教育」は必要か？	2
新任教官紹介	20
退官の辞	順不同21
沼田研修で思ったこと	25
西条移転を考える	26
飛翔箱1「ソクラテスの妻」	31
私はこれに燃えていますっ!!	34
街の総科	38
研究室紹介	46
ソフトボール大会の記録	48
飛翔箱2	50
学部の記録「人事異動」	57
特別研究論文題目紹介	59
編集後記	66



特集：「一般教育」は必要か？

「大学設置基準大綱化」主旨

- ①一般教育の理念・目標が大学教育全体の中で実質的・効果的に実現されるよう、カリキュラム及び教育体制を改善する。専門教育についても内容の現実化、国際的な水準の維持、専攻領域の広がりを求める。
- ②これにあたっては大学の自主性を尊重し各大学がそれぞれ個性的で充実した教育を行うことを目指す。
- ③これに伴って既存の大学の改組や転換を行う場合、その審査は弾力的に配慮すべきである。
- ④「大学の水準の低下」や「大学らしからぬ大学の出現を防ぐ為、各大学は絶えず厳しい自己点検を行い、自己評価を提出する。

以上のような答申が昨年2月8日に提出されたのを皆さんご存知だったでしょうか。この答申では確かに、「一般教育」の理念の重要性は認められつつも、その運営は大学側の自主性に委ねるといふ事だ。これは、制度的保証という面について考えてみるならば一般教育の重視という立場にとっては、全くの逆効果なのではないか。つまり、一般教育軽視論者にとっては規制が緩和された事により、ここぞとばかりに専門重視の風潮を促す結果になるのではないかと予想されるからである。

そのような危惧の中で、我が広島大学総合科学部では早速委員会が設置され、「一般教育を担う総合科学部としていかに考えるべきか」と、議論されてきたようである。そう、今、「一般教育」を改めて見つめ直す時が来たのだ。教官だけでなく学生1人1人が問題意識を持たねばならないのだ。

という訳で、今回の飛翔では「一般教育」の特集を組む事になったのだが、「一般教育」、ひいては、「大学って何だろう」という所まで考えてみようではないか。

一般教育を考える

天野学部長

昨年七月に、法律上大学設置基準が改正され大綱化されて、従来の一般教育科目などの区分がなくなった。このことは「教養教育、一般教育が不必要なのだ」ということと同じではない。第二次大戦後、日本の高等教育が改められた大きな点は民主国家の一員として必要な教育を身につけるために一般教育が専門教育と区別され設置されたことだ。高等教育におけるこの大学論、理念は現在も生きているのだ。いや科学技術が今迄にない速度で進展し、国際社会が揺れ動き、多様な価値観が要求される現代においてこそ必要なものではないだろうか。原子爆弾の開発使用を例にあげるまでもなく科学技術をどのように利用するのか、高等教育を受けた人は自分で考え行動する能力を持つことは社会的な責任であると思う。設置基準の中にも豊かな人間性の涵養、幅広く深い教養を身につけ人類の幸福のために尽くす能力を培うことの重要性が指摘してある。

では何故、一般教育は無用だとか面白くない、不必要だと声高く云われているのだろうか。大学に入学したら早く専門の知識を身につけすぐにでも役立つ専門家になりたいと考える大学生が多いのではないだろうか。元来専門の授業と一般教育の授業とは一体化したものであり、4年間一貫したカリキュラムで学生は勉強すべきものなのだ。しかし色々な事情で入学後、一・二年で一般教育を終え三・四年次で専門教育を行う。つまり両者は分離されてしまったのだ。大学の教育は単に知識を修得するだけではなくて自ら学ぶ方法を身につけることが重要なのだ。生涯学習が強調されている理由は何だろうか。現在のようにあらゆる分野の知識拡大のスピードの早い時代では社会に出ても自ら学ぶ習慣が大切なのだ。これこそ高等教育を受け一般教育を学ぶ過程で身につくものではないだろうか。

総合科学部が広島大学の中に作られた理念はまさに上に述べたような幅広く深い教養を

身につけた人間性豊かな人間を四年間一貫教育で育てることであった。着実にその成果は上っていると確信している。今後は他学部にも所属している広島大学の学生に対してもよりよき一般教育のありかたを模索し、実現して行く具体的な計画を立てるつもりである。広島大学は専門学校ではない。別々の学部の寄り集めでもないはずだ。総合大学なのだから、そのメリットを生かして更に大きく飛躍する機会として大綱化をとらえたいと考えている。

一般教育とは？

最近、「一般教育」に関することが新聞などでとりあげられる機会が多くなっていますが、ところで「一般教育」とはそもそも、どのようなものなのでしょう？

そこで、ここでは「一般教育」というものをあらためて見つめなおすための最初の一步として、「一般教育」についてくわしく見ていこうと思います。

一般教育の定義

まず最初に教育学辞典に著されていた「一般教育」についての定義をながめてみてください。

「大学教育は、特殊領域での概念能力と技術能力が統合された専門性を通して、自己を個人的に実現しながら生きていく人間の形成を目指すものであるが、この大学プログラム全体のなかで人間として生きていく側面を担当するのが一般教育であって、専門性の獲得に努める専門教育とならんで大学教育を構成する本質的要因である」

なかなか難しい言葉で書いてありますが、要するに、実用性を重んじる「専門教育」に対して、安易な実用性を否定し人間形成を重んじるのが「一般教育」だということです。

一般教育の必要性

「一般教育」の定義について見てもらったところで、次になぜこのような教育が大学教育に必要とされたのか、その背景を見てもらおうと思います。

以下の文章も教育学事典からの抜粋です。

「一般教育という考えが大学教育において必要とされるのは、各専門分野の過度の細分化のためである。

学問の細分化は学問領域の相互関係と実践的適用を犠牲にしがちで、学生が知識を人間行動ないし人間の生き方に関係づけることを困難にしてきて、人間教育の中心が失われていった。

そのため、専門を越えた広い理解の共有を回復することにより、学生が各自の専門の克服を学び、自由な展望を生み出すことを目指して、大学教育における内容および方法を再編成しようとする原理として、一般教育の言葉が使用されるようになったのである」

これもまとめれば、高度に専門化した大学教育のなかでの「人間教育」の再生のために「一般教育」が導入されたということです。

そして、先程の定義にもあったように狭い専門性ばかりにしがみつからないのが「一般教育」ですから、この「人間教育」の目的というのは「専門バカ」をつくらないという点にあると思われまます。

一般教育の特徴

それでは最後に、大学における学問にとって必要な一般教育の特徴を見てみたいと思います。

- 1、思考と行動、理論と実践の統合に努める。
- 2、無関係と思われるもの間に関連性をみつける相互関係的思考と諸観念の統合が重視される。
- 3、学問と芸術の諸分野においてすでに確立された、あるいは現在確立されつつある知識と技術を、それを生み出した特定の専門集団への所属を志望する者に限定することなく、広く人間一般に適切なものとなるように、学生に媒介する。
- 4、現代社会共同の問題に批判的建設的に対処する能力、とくに価値識別能力と総合的判断力の育成を図る。

- 5、学生は、自然、社会、人文諸科学などの主要領域における学習の仕方、学問の方法論、とくに学際的接近法を学ぶ。

ある人の言葉に「教養とは、物の見方、考え方を身につけることである」というのがあります。この言葉を聞いて、あらためて「一般教育」の特徴をながめなおしてみると一般教育と「教養」との間には何らかの関連性が見えてくるのではないのでしょうか。

つまり、「一般教育」の究極の目的とは、「教養」を身につけた人間あるいは「教養」の身につけ方を学んだ人間を育てることにあるということです。

一般教育とは？

以上の事柄をふまえて考えていくと、「一般教育とは何か？」という問いに対する答えとしては「一般教育とは専門バカにならないように教養を身につけるための学問である」ということになるのではないのでしょうか。

(文責 中島 英紀)

大学っていったい…？

日本の大学の役割の変化について、大まかにとらえてみよう。大学は様々な役割を担わされてきたが、それは時代によって大きく変化した。その大きな変化をまとめると、

①どこの人材養成機関か？

②だれのための大学か？

③大学教育はどうなったか？

と、この3つである。では、これらがどのように変わっていったのか、戦前・戦後の大学の歴史を通じて見ていこう。

①どこの人材養成機関か？

大学とは、色々な意味で人材養成の場でもある。そもそも日本に大学ができたのは何故か？これは、日本の開国と大いに関係がある。

開国に伴い国外に目を向けてみれば、欧米諸国は産業革命を経て帝国主義の時代を迎えていた。一方日本は、富国強兵や殖産興業を唱え、ようやく近代化への一歩を踏み出したばかりで遅れていたのである。日本は帝国主義の列強の中で外国との遅れを取り戻す為に、近代化を早急に推し進めなければならなかった。

そこで、近代化に必要な西洋文化の移植と将来国に役立つ人材の養成機関として、大学は成立したのである。戦前は、大学は国の人材養成機関であった。

ところが戦後、高度経済成長時代を迎え、日本が産業社会化して状況が変わった。企業は大学をマン・パワー（労働力）の供給源として求め、好景気により大学卒の需要も増加した。つまり、戦後の大学は産業のための人材養成機関となっていったのである。

②だれのための大学か？

③大学教育はどうなったか？

戦前の大学に入れたのは、ごくわずかの数で特定の階層のエリートで占められていたのは、皆さんもご存知のことであろう。また大学は日本の近代化の為に将来役立つ人材の養

成の場として成立したので、したがって教育の内容も、専門的教育が中心であった。

そして戦後、国民教育の全面的改革の一環として大学改革が行われた。「国民の教育を受ける権利」、「教育の機会均等」の保障が日本国憲法で示され、大学も今までの一部のエリートのための「象牙の塔」から「国民の為の大学」の創造を目指すことになった。

ところで大学改革のポイントを挙げると、

- (1) いわゆる国家目的への奉仕機関から「学術」の中心への転換
- (2) 学問の自由と大学の自治の保障
- (3) 研究と教育の統一の理念
- (4) 一般教育の重視

等、現在の大学の基盤となるものであった。

さて教育面においても、「一般教育の重視」という新たな改革がなされた。これは戦前の専門的に細分化した視野の狭い人間形成を反省し、専門に片よらない広い視野と総合的な視点を持てるような教養教育を行おうという理念からきたものである。

1947年(昭和22)の学校教育法制定により、戦前の旧制大学から新制大学へ転換することになった。しかし実際は旧制大学の部分は残っており、従来の専門教育に一般教育がつけ加わる形となってしまった。また一般教育の理念は大学教育担当者に十分理解されておらず、一般教育は人間形成の教養としてではなく、専門科目の基礎としてみなされた。この二重性が後の一般教育問題へつながっていく。

戦後の教育改革は教育の機会均等の原則を取り、制度上で6334制の単線型学校制度を確立した。これはすなわち、中等教育(高校まで)を終えた全ての学生に大学の入学資格が与えられることを意味した。戦後の改革により高等教育機関(大学)への進学が容易になり、633と教育を受ける年数が伸び、より上の教育を受けたいという学生が増え、進学率が上昇した。また大学も「国民に開かれた大学」を目指していた。戦後、大学進学者が増大し、そして大学は大衆化されていくことになる。

高度経済成長時代、大学進学者数の増加は加速化された。高度経済成長により日本の家計収入や生活水準が向上し、家計に高等教育

を受けさせるゆとりができたことも要因である。また大学卒の需要が高まり、学生の就職状況が良好であることから、国民に学歴信仰を植えつけいっそう大学進学熱を強化した。そして戦後2つのベビー・ブームにより青年人口は増加し、大学・短大が次々と新設されていった。

戦後の教育改革、高度経済成長は大学進学者を増加させた。同時に新設の大学も増加させた。そして時代の変化の中で、かつての一部の学生の為の「象牙の塔」から「社会制度としての大学」へと確立していった。こうして大学はよくもわるくも大衆化していったのだ。

現在、再び大学改革が行われている。近年一般教育のあり方が問われ、一般教育を行う教養部が廃止されつつある。社会の風潮では一般教育よりも専門教育の重視を求める声が強い。

また大学の問題において、マス・プロ教育や研究費、施設の不足などといった問題もあがっている。つまり、今までの矛盾が表面化したのである。

これから大学がどのように変化していくのかは、もしかしたら我々の手にかかっているのかもしれない…と言い残してこの文章を終わる。

(文責 南場 千里)

外国との比較

—アメリカの一般教育より—

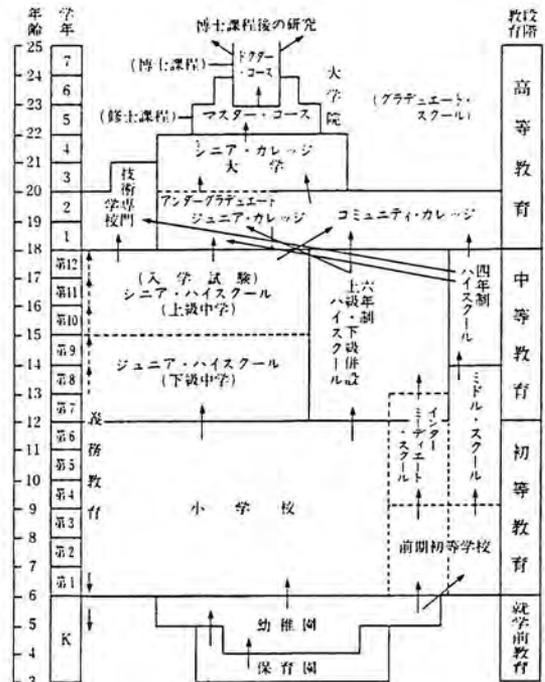
さて、ここでアメリカの一般教育をみてみよう。でもその前に少し大学のしくみを述べようと思う。右の系統図を見てもらいたいアメリカの学校のしくみがわかると思うが、日本の大学にあたるのが、「カレッジ」「ユニバーシティ」である。そしてその下の「ジュニア・カレッジ」と「コミュニティ・カレッジ」が、日本の短大にあたる。(後者は、専門学校的色彩が強くパートタイムの学生、つまり社会人も多い)ただ、日本と違って、短大で自分が取得した単位を持って、大学に編入することができる。(取得した全ての単位を持っていけるとは限らないが。)そして、大学間でも単位を持って移ることができる。

ところで「カレッジ」「ユニバーシティ」は日本の大学にあると上述したが、日本が、最初の2年間一般教育で、後の2年間専門教育をするのに対しアメリカでは、4年間のほとんどで一般教育を行う。そのため、日本とアメリカでは、同じ「一般教育」でも多少、相違点があると思う。例えば日本では、カリキュラムについて外部の影響を受けることは稀だと思うが、アメリカでは多くの学生をひきつけるため、カリキュラムに特色を持たせたり、カリキュラム論が盛んであると言う。

少し古いかも知れないが、1945年公表のハーバード委員会の「自由社会における一般教育」には、一般教育について次のように述べている。「一般教育は、基本的には全体的な人間 (the whole man) の育成をめざすものであり、充実した生活哲学から生ずる内面的な統合、均衡および堅実さを持った全人の発展を指向し、自由人の共同社会の建設を目的とする。それゆえ、一般教育は、一方では、自分自身を統制し、判断し、計画できる自由をもった自由人の教育の側面をもつとともに、他方では、偏狭主義を克服し、普遍的で客観的なおらかさをもった自由化された人間の教育の側面をもつ。」

これを一般教育の定義の1つとして、現実はどうなのだろうか。

日本では一般教育の授業のほとんどが大きなクラスの上、教官が話す一方で学生が聞く一方といった、まるで役割分担がなされているかのように両者の立場が分かれているのに対して、アメリカでは、大クラスもあるが、総じて小さいクラスで授業を行う。そして、これは小さい時からの教育が日米で違うからかも知れないが、非常に議論が活発であるという。また、大クラスでもクラス全員に対し順番に3人対3人のディベートをすることや講義のほかにディスカッションの時間を設けることもある。(大クラスの授業としては稀な方かも知れないが。)



1987年現在のアメリカの学校系統図

出典 Center for Education Statistics: Digest of Education Statistics, U.S. Government Printing Office, 1987, Figure 1, p.5 参照。

もちろん、日本式の聞いて覚えることと、アメリカ式の聞き疑問に思ったことを自分で質問に変え、そして質問することで覚えていくことと、どちらがより優れているかなどということはいえないだろう。しかしそういった討論の中から前述したハーバード委員会の言う「それゆえ…」のようなことがはぐくまれていくような気がする。

ところで、私がこの記事を書くにあたって私は海外旅行の経験もないのだから、ましてアメリカの大学を直接見てきたわけではない。そのため数冊の本を調べた後、数人の、留学経験があったり、アメリカの大学を卒業したり、アメリカでも日本でも教えたことがある（あった）教官に話をうかがった。そのことによって、アメリカの一般教育は、結構大変だと感じた。なぜなら、ある授業を聴講しようと思ったら、たくさん本を読んでこななければならないし、前述のとおり討論を中心に授業が行なわれるのだから、出席もきちんとしなければ単位はとれない。おまけに成績評価はきびしいらしい。ある英語の先生は、日本の大学はクラスの数が多い上に、出席が非常に悪いと言っていた。

このようなアメリカの一般教育でも問題になっていることもある。例えば、学生はたくさん授業から、いくつか選択する訳だが、その授業科目に新しいものを入れたいと思っても、そのためにはどれか科目を抜かねば学生の負担になる。でも削減される科目の先生のこともあり、簡単にはうまくいかない。また、学生が選択した科目はその選択幅がひろいため各々で異なってしまう、学生間で共通した科目が少なくなる。そのためもっと必修的な授業をつくるべき、という意見もあるという。このように一般教育の全体の量は、現状維持か縮小という意見が一般的のようだ。

実際、カーネギー教育振興財団がまとめたところでは、一般教育、主専攻、選択教科の3つの領域に使われる時間の比率で、一般教育の履修要件は43%から34%へ減少した。ちなみに主専攻は33%で変わらず、選択教科が24%から33%に増加した。またこの傾向は1960年代以降の高等教育の大衆化によって顕著となった。なぜなら、平均的にみて大衆化

によって学生の学習に対する準備不足を生み出し、学生のカリキュラムに対する好みに応じた選択教科や職業教育が増大したためだ。つまり私が思うに、こうした傾向は、学生や社会の要求に応じて大学が柔軟な態度を示した、時代に対応した教育をしようという態度の現れだろう。

日本も近時、大学教育に関して様々な改革の動きがある。そういった改革に私は期待している。

(文責 内田 友宏)

参考文献

現代アメリカ教育研究会『特色を求めるアメリカ教育の挑戦—質も均等も』：学生消費者の時代 アメリカの大学「生き残り」戦略 喜多村和之

Center for Education Statistics: *Digest of Education Statistics*, U.S Government Printing Office, 1987



一般教育はどう変わるのか？

～京大、神大における模索～

現在、全国の大学において教養教育を中心とした大学改革が進められている。その内容は一言で言うと、ハードウェアとしての教養部組織の改編、ソフトウェアとしての一般教育制度の見直しという二点に集約されるといえる。新制大学制になって既に四十数年が経過した今、何故このような改革がなされるのだろうか。

ここでは具体例として京都大学、神戸大学における改革案を取り上げ、この二校での教養教育の位置づけや今後の在り方について考えてみたい。両校では現在、大学全体の教育体制の見直しが進められているが、今回は教養教育の改革を中心に話を進めていきたいと思う。尚、参考資料等に乏しく不明瞭な点の多い憶測まじりの文章になったしまった点を、予め御容赦願いたい。

[神戸大学編]

神戸大学では、現行の一般教育の抱える課題を次のように捕らえている。

○構造的、制度的問題

一般教育と専門教育の連携の不徹底
教育課程における研究と教育の乗離

○教育理念と社会環境の非対応化

そこで教養部を廃止し、以下のような方向性で全学を挙げ、これらの諸課題の解決を目指している。

○現行の一年半の教養部制を廃止し、四年一貫カリキュラムを全学に設定する。これに伴い従来の教養部の教官は一般教育、他学部の教官は専門教育という担当の区分をやめ、各教官が自身の能力に応じた最適な授業科目を担当する。

具体的には授業科目を現行の「一般教育」「専門教育」から「教養原論」「関連科目」「専門科目」「自由選択科目」の四区分に改編する。このうち「教養原論」と「関連科目」は、従来の一般教育に替わる共通的基础科目と思われる。教養部の廃止に関しては、まず元教養部の大半の教官を他学部に分属させる。次に、元教養部の語学、文化、社会、情報系の一部の教官と、やはり改編が予定される教

育学部の一部の教官で、新たに国際文化学部を組織する。これは、国際交流の発展に伴う異文化理解、国際的協調と共生といった課題をテーマに、コミュニケーション学科、地域文化学科という二学科から成る主として文科系の学部である。

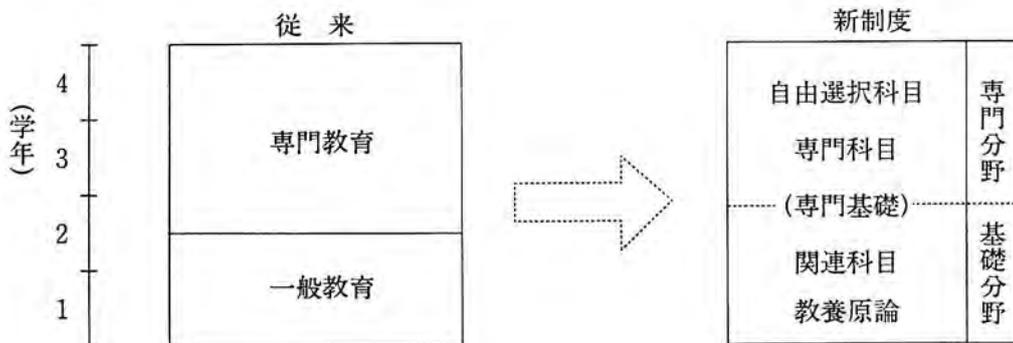
○従来の一般教育を「教養としての教育」「専門の為の基礎教育」とに分離し、前者は全学で、後者は各学部が責任を負う。これにより、例えば教養部で行われていた物理や数学は理学部で、経済学は経済学部で行われる事になる。又、前者には全学必修的な科目設定（先程の「教養原論」「関連科目」がこれに当たり語学や体育、各種概論といった講義を指していると考えられる。）を、後者には学生の専攻を考慮した科目設定を行う。

このようにして二つの要素を分割、独立させる事で、カリキュラム全体の統合性の確保や教育効果の向上が可能になる。しかし実施における各学部間、更には個人レベルに至るまでの様々な問題が既に山積している。例えば「専門の為の基礎教育」を理系では明確化できても（一例として、物理や工学を学ぶ際に必要な数学などがこれに該当する。）文系においては難しい。又、多くの学部にとってこの「専門基礎教育」は従来の専門教育が

増えた事を意味し、今後全学に対して「教養としての教育」も開講しなければならず教育負担の増加が著しいなどである。

このような神戸大学の一般教育の改革は、教養としての教育よりむしろ専門の為の基礎教育を重視する傾向にあると思われる。言い換えれば、専門家の養成という大学の一機能をより効率化するシステムの模様と言えらるう。その為、従来の一般教育の枠が狭まり、教養教育の選択の自由度が小さくなっている

印象を受ける。無論従来に比べ、より効率的なのだろうが。答申では、学生の安易な科目選択を排除するとしているが、これが全く無駄を作らないと拡大解釈され、全人格の育成という重要な教育の要素が見失われてしまっは困りものである。効率重視、能率主義に基づく洗練された教育システムの開発は誠に結構であるが、果たして我々のような歪曲した受験教育しか受けてこなかった学生にとって、息苦しい環境を生みだしはしないだろうか。



[京都大学編]

京都大学では従来より教養教育を「紳士のたしなみとしての教養主義的教育」と「専門教育の前段階、基礎的専門教育」という二つの側面で捕らえられてきた。しかし教養部での実施において、学生側からカリキュラム、講義内容の目的が不明瞭であるという不満が挙げられ、一方教養部教官側からも担当講義数が多い、研究費が少ない、学生の単位取りゲーム化といった問題点が指摘されてきた。そこで京大では、教養部を廃止して総合人間学部へ改編し、ここでの新たな一般教育の展開を予定している。

新しくできる総合人間学部とは「人間学科」「国際文化学科」「基礎科学科」「自然環境学科」の4学科から成り、元教養部の半数程度の教官が中心となって組織される。この学部は、研究項目や専門教育と共に全学の学生に対して従来の一般教育に相当する高度一般教育（仮称）を実施する事などから、我が総合科学部に極めて似た学部といえる。高度一般

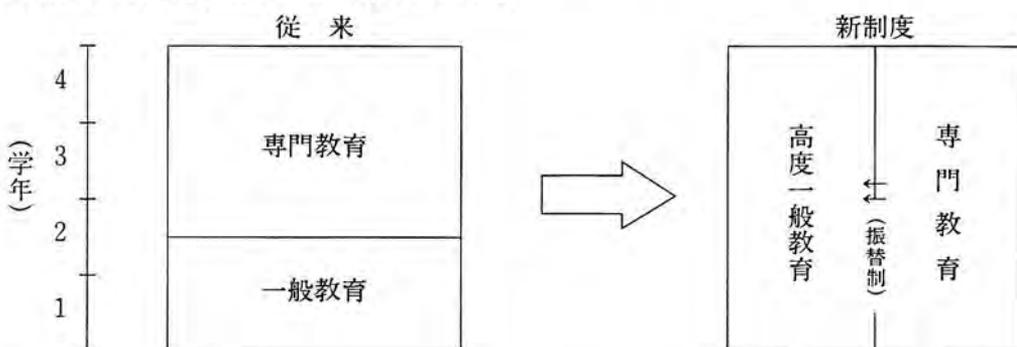
教育とは、従来の一般教育の内容の見直しに加え、総合人間学部の専門科目を一般教育として履修可能にしており、以下のような方向性で実施を予定している。

○教養課程と専門課程との区分を廃止し、四年一貫した教育を実施していく。これは従来の一般教育を終えた後に専門教育を行うという垂直的なカリキュラムを改め、両者を水平に並存させ専門教育への早期参加機会を与える事を意味している。これにより、例えば入学時から高度な専門科目を受講したり、一般教育科目や語学を3、4年時に受講したりと自由なカリキュラム設定が可能になる。

○専門教育に副専攻制度を導入し、主専攻の関連分野や不足分野を補い柔軟で創造的な活躍の可能性を得させる。これは、おそらく総合科学部専門における選択必修と自由選択に類似した制度と思われる。つまり、従来主専

攻の枠しかなかった既存の学部の専門教育に、新たに副専攻の枠を増設する事で、学問に対して広い視野を築くという教養主義的教育の要素を付加するものであろう。又、専門教育で取得した一定数の単位を一般教育の単位に換算できるとしている。総合科学部の文系、語学系専門科目における振替制度的なものを全学において実施するものと見られる。

京都大学の一般教育改革案には、我が総合科学部で採用されている幾つかの制度に類似するものが見られ実に興味深い。(それ程、我が学部の制度は先進的なのであろうか?) 具体的には、従来型の一般教育の枠組みを、



両校の改革案の共通点として、まず教養教育が専門教育の準備段階として実施されるのではなく、その内部に4年一貫した形で組み込まれる点が挙げられる。これは大学における学部＝大学院の教育的つながりの中に一般教育も加え、大学教育全体の一貫性を高める事を目的としている。このように現在の一般教育は、教養教育という本来の姿に専門基礎教育という機能を付け足した二面性でとらえられている。しかし専門基礎教育の要素が肥大化し、本来の姿が見失われつつあるのではないだろうか。この事は、大学教育の目的が社会的ニーズという大義名分のもと、人間形成から専門家の養成に重点が移行していく危険性を反映しているのかもしれない。

やはり専門基礎教育は、専門科目として実施されるのが望ましく、教養教育とは分離独立させるべきであろう。大学教育が、社会に振り回されるものであっては困るのである。(もっとも現状の大学4年制では到底実施が不可能な事は誰の目にも明らかなのであるが。) この根本的矛盾が解決されない事は、今後も教養教育改革の余地が潜在し続ける事を意味している。その点では、既に十数年前に改革を行った総合科学部も例外ではない。抜本的改革がなされぬ限り、常に一般教育制度を見つめ続けていかねばなるまい。

最後に、今回の改革案は制度上の見直しに終始しているが、その前提として質の高い講義がなければならない事を忘れてはならない。ここで言う質の高さとは、個々の講義内容に留まらず、それを担当する教官が優れた教授能力や人格を持っている事も含まれる。これらの条件を満たして初めて「良い講義」と言えるのである。現在大学で行われているもののうち、どれだけ「良い講義」と呼べるものがあるのかは分からないが、個々の講義の質的改善を疎かにするようでは、折角の新制度も直ぐに硬直化し、形骸化する運命なのだ。

(文責 大村 尚)

一般教育に関するアンケート

現在、教養部の廃止を含む一般教育の制度的改編という転換期を、一部の大学は迎えようとしています。そして、この転換期のなかで改めて大学の役割も問い直されているようです。

そこで今回、「一般教育」について多くの人たちの意見をアンケートを通して寄せていただきましたので、皆さんが「一般教育」や「大学」について考える時の参考にしてもらえればと思います。

また便宜上、アンケートの回答を5グループに分けることにしました。グループは以下の通りです。

- A 総科（文系）
- B 総科（理系）
- C 文・法・経
- D 教育・学教
- E 工・理・医・歯・生医
(哲学受講者)

1, 一般教育は必要だと思いますか？

	はい	いいえ
A	77%	23%
B	83%	17%
C	84%	16%
D	86%	14%
E	82%	18%

主な理由

はい

- ・ 専門以外の興味ある分野が勉強できるから
- ・ 広範な教養を身につけることが必要だから
- ・ 語学は役立つから
- ・ 高校では学べないことが学べるから
- ・ 大学での学び方を確立する時期だから
- ・ 専門に入る前に基礎を充実すべきだから

いいえ

- ・ 興味のないことはやりたくないから
- ・ 大学は専門だけをやるべきだから
- ・ 将来役立つとは思えないから
- ・ 単位をそろえるためだけのものだから
- ・ 教養は新聞、本などで自然と培われるものだから

2, 専門教育と一般教育の関わりをどのように考えますか？

- ・ 一般教育は専門教育の基礎
- ・ 一般教育を学ぶことで自分の専門を違った視点から眺めることができる
- ・ 専門とは違った考え方を一般教育で学べる
- ・ 一般教育は専門教育を補う
- ・ 一般教育では専門教育よりも総合的な知識を学べる
- ・ 一般教育と専門教育とでは関連性がない
- ・ 専門教育だけでも一般教育の働きを十分果たしている
- ・ 理系の者にとって一般教育の文系科目は役立ちそうもない（逆もありうる）

3, 現状の一般教育の体制に満足していますか？

	はい	いいえ
A	24%	76%
B	37%	63%
C	47%	53%
D	37%	63%
E	33%	67%

4. 一般教育に関してどのような改善点があると思いますか？

- ・ 専門に関係ない科目はとらなくてもいいようにする
- ・ 講義は聞きたい人が必ず聞けるようにする
- ・ 制限単位をなくす
- ・ 指定科目をへらす
- ・ 専門をやりながら自分の興味ある一般教育科目をとれるような期間的余裕をもうける
- ・ 文系向きの自然分野科目をふやす
- ・ 資格を取れる講座をもうける
- ・ 一般教育の期間を短くする

今回のアンケート結果をまとめながら思ったのは、高度な専門教育が行われる他学部の学生ほど「一般教育」を比較的重要なものとして見なしているのではないかという事でした。

専門分野だけに閉じこもる事に対しては、総科の学生よりもかえって危機感が強いように感じられました。

もしかすると、総科の学生は専門の勉強ばかりをやるわけではないので、「一般教育」に対して新鮮な印象を抱きにくい傾向にあるのかもしれませんが。

(文責 中島 英紀)



mitazu

教官アンケート 結果報告

学生に総合科学部の行ったアンケートとほぼ同様のアンケートを教官に対しても実施してみた。その結果は以下の通りである。

1. 一般教育とはずばり何を教える事だと思われませんか？

学生に尋ねた場合と回答は同じようなものであった。「社会にでも恥ずかしくないような幅広い教養・常識」「事象への見方・考え方」などという“直接的に専門に関連してこない事を学ぶ”という意見がやはり圧倒的であったが、一般教育を専門基礎とする考え方も少なくはなかった。その他、「自分の学問・研究を行う姿勢を示す事」「学問とは何かという事についてショックを与える」という教官らの積極的意見も見られた。

2. 大学内での立場を、「教育者」としての立場と、「研究者」としての立場のどちらかに取って分けるなら、自分はどちらの立場が強いと思われませんか？

結果としては、「研究者」という意見の方が多かった。しかし、「いい教育はいい研究を行っている中からしかでてこない。」「研究者として優れていれば当然教育者としても優れているはず。」として両者は不可分だという指摘を幾人かの教官から受けたのだが、まさにその通りであったと思う。研究と教育の統一こそが大学の理念であるという事を考慮し忘れた愚問であった。申し訳ありません。

3. 一般教育は必要だと思われませんか？

ほとんど必要という意見であった。その理由としては、「大学は専門バカをつくる場所なのではない。人間・人格形成の場なのだ。」という、一般教育を専門と切り離れた人間教育の手段とする意見と共に、「専門の位置づ

けの認識」という専門と結びつけて一般教育を考えようとする意見の両方が見られた。

「一般教育の影響で専門の進路変更をする学生が生まれたとしてもおかしくない」というように「一般教育課程」を非常に重要視する教官がほとんどであった。

4. 現状後一般教育の体制に満足していますか？

ほとんどが「満足していない」という意見であった。

とまあこのように回答が出揃った訳なのだが……「一般教育」に対する理念というものは非常にはっきりしており崇高なのだがいざその実現となるとなかなか思うようにいかん……というのが実情のようである。その証拠にほとんどの教官が一般教育の必要性は高く評価しているもののその現状には満足していないのである。理念通りには動かさない諸事情も多いのだろうが、きっと努力次第で変えていける事だってあるはず。我々総合科学部は前進あるのみをモットーにがんばっていこうじゃないか。そのきっかけになり得るかもしれない教官方の希望をのせておく。

我々はこれだけは言いたいっ!! (教官より)

- 1年、2年だけで教えるのはおかしい
- 全カリキュラムを系統立てるべき
- 少人数ゼミのような場がもっと欲しい
- 取得単位数を制限するべき
- 全学部の教官が担当すべき
- 学生、もっと意欲を持って!!
- 教育者側の努力、熱意も大切
- 基礎教育と一般教育にわけるべき

最後に。このアンケートの質問項目や配布・回収方法に様々な不手際があり多数の教官方に御迷惑をおかけした事を深くお詫びします。

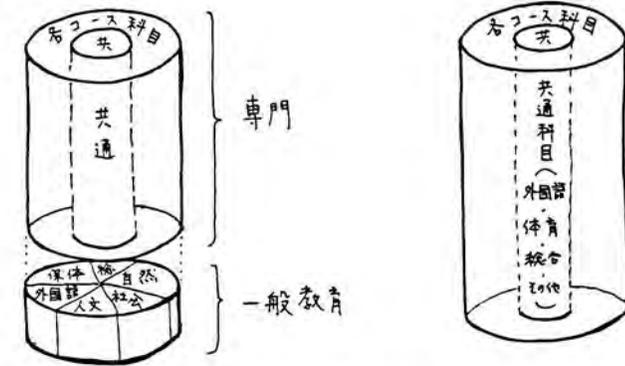
How About This?

幅広い知識、教養は必要だ。専門バカにはなりたくない。でも今のシステムじゃあどうもうまくいかない。ここから□単位をとらなきゃいけないっていうけど興味をひくのがないじゃない。あの講義はとってもおもしろそうだけど卒業単位に入れてくれないしー。

あっという間の4年間、なんでもかんでもやるわけにもいかない。ではどんなシステムなら、ムダなくムリなく有機的に知識をふくらませていけるだろう。

「こんなのはいかがでしょう。」というシステムを私たちに考えてみた。実現の可能性を具体的に検討したものでなく、非常に大ざっぱなアウトラインだが、今後、改善をしていく際に汲み上げられるところがあるだろうか。

A. 開講される講義について

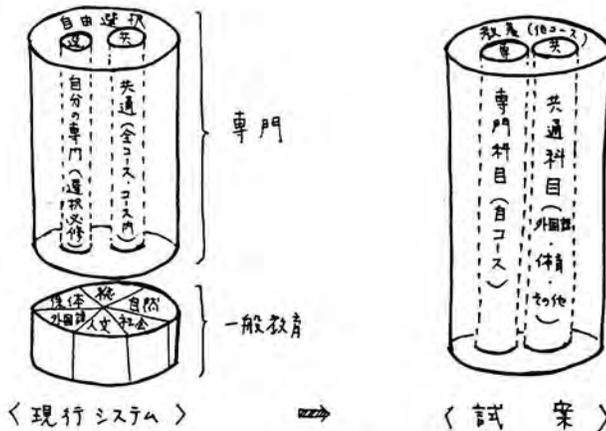


< 現行システム >



< 試案 >

B. 各人の理めるべき科目について



< 現行システム >



< 試案 >

図1

(図 古川 博子)

現行のシステムと私たちの試案をそれぞれ図に表してみた。

A：開講されている講義の体系

B：各人が必要単位で埋めていくべき枠組

である。つまり、Bのそれぞれの容器をAから選んできた単位で満たしていくわけだ。

それでは、変更した点を挙げていこう。

現行のシステム

試案

A. 開講される講義について

一般教育科目	人文分野 社会分野 自然分野 総合科目
外国語科目	
保健体育科目	
専門科目	共通 各コース

→

共通科目	外国語 体育 総合科目 他
各コースの科目	地域文化、社会科学、外国語 (人間文化) 数理情報科学、物質生命科学 自然環境研究、生体行動科学

●現行の一般教育科目には

1. いわゆる教養と呼べるもの
(e x. 哲学、日本国憲法…)
2. 専門教育の基礎となるもの
(e x. 数学概論、物理学概論)

が含まれている。

●左の2つについてはそれぞれのコースに配

分する。1についても分けられるものは分け、

分けられないものについては共通科目とする。

「一般教育科目」としての科目群をくくり

出すことはやめるわけだ。

B：各人の埋めるべき枠組について

一般教育科目	人文分野 社会分野 自然分野 総合科目
外国語科目	
保健体育科目	
専門科目	共通 (全コース、コース内) 選択必修 自由選択

→

共通科目	外国語 体育 他
専門科目 (自コース及び振替)	
教養科目 (他コース)	

☆1年次は、専門、教養の区別なく、各コースの講義を自由に選択する。

2年次にコースを決定した段階で、1年次に取得した単位のうち自コースにあたるものは専門科目として、他コースにあたるものは教養科目として、それぞれ認める。

ここがよくなる！

——“教養”を中心に——

現行の「一般教育」においては、卒業単位として認められるものが36単位と限定されている上に、人文・社会・自然の各分野から各8単位以上、総合科目から4単位以上取らねばならない。私たちは何が不満なのだろう。

その1

あれも興味がある、これも取りたい、と思っても、卒業単位に換算できなくなる。もちろん36単位を越えて取っているのだけれども、とりあえず単位をそろえることを優先してしまう。たとえば3、4年になってから、一般教育科目の中に自分の研究に関連するものが見つかるといい。そんなときも、単位数が気になって躊躇してしまうということはないだろうか。…「時間があったら取ることしようか」…

試案では

「一般教育科目」と「専門科目」という枠組がないので、現行の一般教育科目に含まれるような内容の講義であっても、すべてが「専門科目」や「教養科目」として卒業単位に換算される。取りたい順に取りたい時に取れるようになるはずだ。

その2

自分の興味からはずれる分野についても8単位はとらなければいけないのだが、「一般教育科目」のうちの○○分野という少ない数のうちから選ばないといけない。…「取りたいのがない！」…

試案では

「教養科目」という枠に、従来の一般教養科目と専門科目のうちの自由選択といったものが一括して入れられるので、仮に「○単位以上は取らなければいけない」という決まりをつくるにしても、選択肢が増えて取りやすくなるだろう。

制度を緩めると安易な方向に流れてしまうのではないか。あまりにも自由が与えられるととまどってしまうのではないか。そんな懸念も当たっているだろう。しかしだから制度を細かくしようというのは本当に親切なことだろうか。

規制は出来る限り少なく、運用は出来る限りきめ細かく、というのが理想である。理系コースなどでは特に「積み上げ」ということが重要なので、必修というのが増えるのもやむを得ないのかもしれない。しかしそういうものも、もう少し融通がきくように、アドバイスであるとか、モデルを示すといった形に出来ないだろうか。

意欲をもってやろうとするとときに邪魔にならない制度にしたいものだ。

以上はシステムについて私たちの望むものを考えてみた結果である。最後に内容面について、「こんな科目が欲しい」というのを挙げてみる。

総 括

1. 各学問の成り立ち

各コースの土台となる講義を設置する事を提案したい。その学問が、どんな状況のもとで、どんな問題意識によって生まれてきたのか、時代の変化、そこに生きる人間の意欲が、どのようにその学問を変えてきて今に至るのかというようなことを講義してほしい。現在の講義題目にもそのようなものはあるが、そういうものを各コースの基礎段階のメインとして充実させてほしい。それによって、それぞれの学問の持つ独特の視点、問題意識、考え方といったものに触れられるだろう。これは、これからその学問を専門にやっという人にも、教養として聴く人にも役に立つものであるはずだ。

2. 総合科学

全体を統一するテーマを明確にし、その一つのテーマについて様々なアプローチをする、というのが目標だろうと思う。現在の総合科目は、それぞれの教官の講義には興味深いものが多いのだが、全体を貫くテーマとなると漠然としているのではないだろうか。

「総合科学」という試みはとても興味深い。上のような点も含めて、総合科目を充実させ、各コースをつなぐものとして中心に据えてはどうだろうか。

(文責 古田 智子)

以上のような我々の試案に対し皆さんはどう思っただろうか。賛成、反対と意見は様々だろうが一つの案として心に留めておいて欲しい。しかし無論このような一般教育の理念を活かす為の体制づくりが必要なのは言うまでもないのだが、その前に忘れてはならない大前提がある事に気付いて欲しい。

——「意識改革」——である。

まず我々が始めていかねばならぬのはこの意識改革にほかならないと考える。

超加熱する受験戦争の中でひたすら膨大な知識をつめこむ事に時間を費やし、必死にテクニックを身につけてきた高校時代。そして見事大学合格、バンザーイっ!!そしてまず一般教育課程に入り、はたと立ち止まってしまう。余りにも今まで覚えてきた事が役立たないからだ。数学の公式、世界史の年号、英単語…。やってる事自体、抽象的であいまいで、学問を学ぶという姿勢が出来上がっていない学生が戸惑うのも無理はない。しかし……「学ぶ」という過程においては、事項をたくさん覚え込んだ物知りではなく、学問の本質について知りその上で独自の創造的能力や社会にでた際におつかるであろう様々な問題解決の方略を身につけた人をつくりあげるものなのだ。つまり知的消費者から知的生産者への移行を大学に入学した時点で自覚せねばならない。じゃあ今まで覚え込んできた知識って何だったの?って疑問がわく人もいるだろう。確かに直接的に役立つ事って少いと思う。でもどんな時でも、物を知らないって事は自慢にならない。今まで積み重ねてきた事を自信にして生きていけばいい——と思う。どんな知識もどんな経験も無駄になる事はきつとないと信じてる。

次に講義を受ける姿勢について考えてみるならば、ただただ出席してノートを取ってれば学問を理解できる訳ではない。自ら参加し思考しなければ。「思考する」ってすごく不安定な行為だと思う。「これが正解」と最初

から与えられる訳でなく、あっちゃこっちゃと試行錯誤しつつ自分なりの解答を見つけ出していくのだ。とんでもない方向に突き進んでしまう可能性だって大きい。でもそんな寄り道できるのも、大人には信じられないような事に情熱かけれるのも今しかないかもしれない。大学時代ってよく「人生最大の夏休み」って言われるけど、高校までの常に何かにせきたてられるような生活と較べると本当にのんびりできる時だと思う。だからこそこの時期を怠惰に終わらせるのでなく「自分」というものをゆっくり見つめ直していけばいい。

「自分は何者か」「自分に何ができるのか」なんて疑問は若者誰しもが必ずぶつかる壁であろう。しかしそれが解る前にまず大学・学部選択という決断に迫られ自分の偏差値によりいつの間にか自分の道が決定してしまう。でも学問の何たるかが解ってない内に選択しろというのはどだい不可能なのだ。そういう意味で考えてみれば「総合科学部」ってすごく恵まれていると思う。大学に入学し高校までとは異なった物の考え方、広い視野を身につけつつ自分の将来・適性について考えていけばよいのだから。従って大学でまず触れる講義やそれを担う教授の責任は重い。学生にその学問の持つ魅力を伝えつつ興味を引き出していかねばならぬのだから。ただの教養のみなら現在の情報化社会においては、様々なメディアを通じ簡単に手に入れる事ができる。でも講義室で行われるのは教授を介した知識の伝達なのではなく、全人格的な教授と学生の触れ合いなのだ。うーん、何だか抽象的な言いまわしになってしまったが卒業して何年かたって思い出すのって、講義内容よりもどんな人間に出会えたか、そしてどんな考え方に心をゆさぶられたかって事じゃないのかな。

「一般教育課程」。—————
この時代にいろんな分野のいろんな人と出会い、自分の幅を広げていくのが大きな課題なのである。

(文責 岡村 美穂)

.....
この特集を組むにあたり、我々編集部は様々な本、資料を読みあさり、互いの意見をぶつけ合って、我々なりに「一般教育」というものをつかんだ気がします。

皆さんはどうだったでしょうか？
紆余曲折ではありましたが、なんとかこのように形にする事ができました。

「一般教育」においての様々な論議がかわされる中、微妙な立場をとる総合科学部においてこのような特集を行った事で、諸先生方には多大な御迷惑をおかけしたかもしれませんが。適切なアドバイスを頂いた先生方、心から感謝いたします。

.....

新任紹介

地域文化コース 7群

小池 誠

10月からこの総合科学部の社会科学コースに赴任してきましたが、92年度の4月からは地域文化コースに移り、7群に属して社会人類学を担当することになりました。

もう15年位前に東京都立大学で社会人類学を勉強したのが、私がこの道に入り込んだ第一歩です。私が学んだ人文学部はこの総合科学部と似ていて、学際的傾向があり、人類学の講義を聴くだけでなく日本史やフランス文学の講義を取ったりと多方面・多趣味に勉強していました（と書くとかっこうはいいが、フラフラと遊んでいたという方が正直でしょう）。だから、この総合科学部という在り方には親しみを感じ、これから自分なりにその理念を求めていきたいと思っています。

1985年から88年にかけてインドネシアのスンバ島の村落に住み込んで人類学的調査を行い、その時得た資料をもとにした親族と婚姻体系、政治体系の構造と変容の研究がこれまでの（かつ当面の）研究テーマになります。私は多少浮気っぽい性格のため、最近では東南アジアの国民文化の研究にも手を出し、インドネシアやマレーシアのポピュラー音楽のカセットを集めたり、映画・テレビ番組など大衆文化にも強い関心を抱いています（趣味と実益を兼ねた研究とも言えます）。

社会人類学の理論・方法論、研究対象とする社会の研究、そして現実に私たちが生きている社会に対する関心という3点を有機的に関連させるとというのが、私が理想とする社会人類学であります。たとえば、結婚をテーマにしても、社会人類学的な婚姻に関する理論、私が調査したスンバの婚姻体系の分析、そして現代日本の結婚の形態という3つが常に研究の視野に入っているように努めています。これは研究面だけでなく、もちろん講義の中でも心掛けていこうと思っています。

私の研究室は基本的にオープンにしていますので、人類学やインドネシアの文化に関心のある方は遠慮なく遊びに来てください。



退官の辞

広大と広島を去るに当たって

外国語コース（英語）

教授 高橋 規矩

一身上の理由で定年迄あと四年を残して勇退するに当たり、思い残すことが多々あります。第二の人生を早めに歩き始めたのだと考えれば思い切りもよいのですが、元来、私は新しい生活・新しい事柄を始めるのが苦手だし、好きでもないのが、現在、大変複雑な気持ちであります。

私は、昭和四十五年、三十八歳の時に広島に、広島大学に来ましたが、それよりずっと以前に、昭和十六年の秋から三年近く、比婆郡庄原町（現在は市）に住んでいたことがあるので、広島は私には常に故郷のように親しみのある街でした。

赴任した当時、下火になっていたとは言え、大学紛争の火種子が未だくすぶっており、屢々研究や教育を中断しなければなりません。しかし、広島大学に勤務した二十二年の間、幾つかの嬉しいこともありました。例えば、総合科学部が発足して以来の懸案となっていた外国語コース実現の夢が叶えられたこと、又、大学院社会学研究科が出来たことなど。そして、故小川二郎先生を初代会長にお迎えした「中国四国イギリス・ロマン派学会」に所属させて戴き、先生のお弟子である優れた先生方に啓発されて詩人シェリーの研究と翻訳とを行い、その成果を幾つか世に問うことが出来たことです。

これから始まる新しい人生が、如何程私に残されているかは知る由もありませんが、三十八歳から五十九歳迄、研究と教育において私の人生の最も知力の旺盛な時期を過ごした広島と広島大学とは、良きにつけ、そして、悪しきにつけ、私の脳裡から、いつ迄も決して離れ去ることはないでしょう。教職員の全ての皆様、本当に色々とお難うございました。

Kubuwa muzuri sana?

自然環境研究コース

助教授 堀 信行

かつて広報委員のとき「飛翔」担当だった私も、ついにこの欄へ寄稿する立場になってしまった。心の整理がつかぬ間に、いま私は押し寄せる「時の波」にもまれている。総合科学部に勤めてもうすぐ14年。激動の年月を思うとき、すっかり語り部気分になってしまふ自分に戸惑う。

赴任した昭和53年当時は、学部創設の熱気と混乱がまだ残っていた。学部に対する期待感も、今も鮮やかだ。学部創設の理念は私を魅了した。「総合科学部は、未来の大学像を探求しようとする大学人の前進基地に違いない。そこは、創設の熱気を帯びて結集した同志たちであふれているに違いない」と。この確信に私は身震いした。その頃の勢いの慣性で、今までやってこれたように思う。

思えば一般教育や専門教育の講義・実習・ゼミを通して、何んと多くの学生に出会ったことだろう。この間、印象深い学生にめぐり会えた。卒業後も彼らをわが人生の同胞と思える喜びは大きい。学生に自分をぶつけ、繰り返せぬ「その時！」を重ねた年月の証（あかし）として、彼ら以上の宝はない。

それにしても、多くのことがありすぎた。赴任当初は、新大陸西部フロンティアの開拓地よろしく「白人だ」「インディアンだ」と教官が大別され、一枚岩のはずの組織に亀裂が走った。そしてその亀裂から学問の場にふさわしくない哀しいものが噴き出してきた。「学問の研究と自由」を死守する集団が、いっぽうで醸成（じょうせい）する人間関係の闇部に、私の心が痛む。

この14年間に総合科学部は、大学院の充実・学生増・総合移転の準備などを、いささか急いで高度成長を続けてきた。教育組織は、コース再編という細胞分裂を繰り返した。

20年前にケニアで見たスワヒリ語の標語は、「大きいことはいいことだ（Kubuwa

muzuri sana)」だった。それが今は、「小さいことはいいことだ (Kidogo muzuri sana)」とある。総合科学部もわが身を振り返る時かな、と思う。

最後に、私を育ててくれた総合科学部と、これまでに会った素晴らしい人達から受けたご厚情に、心からお礼を述べたいと思います。まことにありがとうございました。

これからも自分なりに「総合科学部していきたい」と思います。

退職の弁

社会科学部研究コース

教授 日南田 静眞

退職という実感が湧かないのですが、先ずもってこの15年間、総合科学部の先輩、同僚の諸兄姉、学生諸君のお蔭で、ともかくの責務を果たすことができたことを心から感謝します。

広島は私の故郷で、昭和26年までは、広島市で少年時代と青春の初めを送りました。戦争には海軍の学校に行き、戦後原爆の焼跡に立って生き残りを痛感しました。原爆で半壊した皆実町の校舎で旧制高校生としてあのマントをひるがえしながら寮歌を放唱した日々を思い起こします。だから総合科学部創設後間もない頃、この広大に26年ぶりに帰ったとき、懐かしさと嬉しきで一杯でした。

旧制高校ではドイツ語の登張先生や地学の鈴木先生などすばらしい先生の指導に恵まれましたが、ただひとつ不満がありました。社会科学の科目が何もなかったことです。原爆で焦土と化したこのヒロシマにあって、敗戦後日本社会の一大変革期に遭遇した私達は、社会の仕組みの勉強をしなければと痛切に思ったのです。先輩の山田舜氏（前福島大学長）がリーダーとなって研究会を作り、中井正一、中川正、建林正喜先生（当時40代で高名な学者）に講師になって貰い課外の勉強を始めました。

新制大学になって旧制高校が教養部となり、人文、社会、自然の三本柱の一般教育課程が

はじまったのは、そのあとです。戦前社会科学が軍国主義者たちによって弾圧されたことは御存知でしょうが、その反省もあり社会的必要も認められて、社会科学が三本柱の一つとして重視されるようになったのです。さらに、広大総合科学部は創設の際、優れたお考えによって「社会文化研究講座」が設置されました。これは、私の旧制広高の経験から見て全く望ましい事が実現したものです。科学技術万能が叫ばれ情報化時代といわれますが、他方では国際政治・経済は急激な変転を遂げつつあり、社会科学の重要性はますます高まっているのではないのでしょうか。

今後とも、もちろん新しい領域や手法の開発にもチャレンジしていただき、この学部における社会科学の研究・教育・学習の深化発展を進めて下さるよう、願ってやみません。ありがとうございました。

議論しましょう、 総合科学とは？

自然環境研究コース

教授 坪田 博行

飛翔に最初にして最後の寄稿です。「退官の言葉」として何でもよいから書いてほしいと編集委員に云われました。立つ鳥が余りにも濁ってしまって、後誰も棲めない程になってしまったのは申し訳ないので控え目に書きます。

曾て、私がやって来た放射線影響や海洋学では、総合科学の意識を持たず既成の領域に閉じ籠っていても、新しい研究を拓くことは出来ません。14年前、総合科学部と云う言葉に魅かれて来たのもその為です。そして正直の所ガッカリしました。実践的には勿論のこと、理念的にも総合科学は殆どなされておらず、その傾向は年々強くなるばかりです。

最近の飛翔 (No41) に「我々は既成の枠を越えたのか」と云う特集がありました。そして「総合科学に明日はあるか？」と投げかけられています。このような議論は絶えずしてほしいものです。それに対する回答となるかどうかわかりませんが、以下は私が環境科学の理念セミナーの1つ「環境科学は Discipline たり得るか」で、「総合科学としての環境科学」と題して話した時の要旨です。やがて出来る研究科の名称を生物圏にしようとする頃、当時の総合科学部長式部久先生と日夜議論した内容でもあります。式部先生が最後に言われました。「貴方の云う総合は Integratedではなくって、Unitedですね。」

環境問題が大きく取り上げられるようになると共に社会的 Needs から生まれた環境科学という言葉は、その中味が確定しないうちに、公害と同義語に使われたり、既存の学問分野に環境を上乗せしたりして使われてきた。

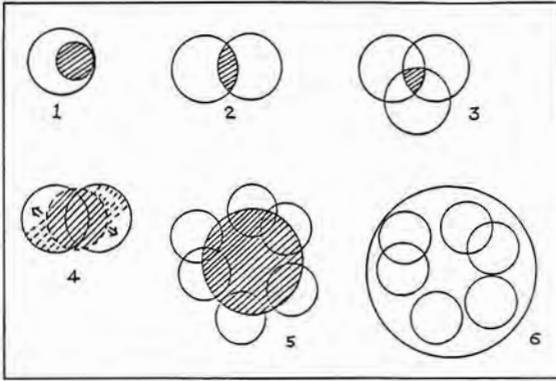
環境科学が Science として認められるためには、その定義づけが必要である。Science であるためには、領域と方法の設定が必要である。環境科学は人間の生存を保証する基本的背景である環境に関

する研究領域であり、全体的総合的視野に立って研究が進められなければならないものであると考える。それは新しい分野ではなく、既存のいろいろの分野にわたって人間生存に関し何が重要で本質的かということに関心をもち、それとの相関性を常に意識して、全体的視野で研究が進められる。

Science は研究者の立場から見た時、確定した領域と方法をもつべきものであるが、これを学生 (弟子) の立場から見た時の育てる要素が discipline である。このような見方をすると、領域と方法とが確立されていない乃至は不確定要素を含んでいても系統だっていれば disciple と言える。この考え方から言えば、天才が能力を獲得するのは discipline からのみ出している。

環境科学は学際領域も含む総合科学である。それは、通常使用されている意味での Interdiscipline (2) でも Multidiscipline (3) でもない。未知の問題も含めたそして、問題解決指向も含む新しい考え方に立つ領域である。本来 discipline という言葉は領域からはみ出さず、専門的であり、それを継承していく性格を持っている。それは結果的に細分化 (1) はあっても、総合化の方向 (4) へは向かない。環境科学は、従来 of 専門化した学問では取り扱えない対象・領域を扱おうとするものである。これを全領域としてとらえようとすると、何でもが全て環境科学になってしまう (6)。その結果は何をやっても環境科学ということになり、本来の目標から遠ざかってしまう。そして、外側の円は誰がまとめるのか。神様でしょうか。環境科学は discipline と言うことでは United Disciplines と言った性格のものであろう (5)。こゝでは、Union を構成する各 discipline の1つずつの独立と発展とそして協調が要求される。

(1)~(6) は、次の図に示された通りである。



外国語コース

LAZALIN, MICHAEL JOHN

By the end of March, I will have taught English at this university for five years. When I first became an English teacher, I remember that my instructor in English teaching methods told me that a teacher had to be selective in what he or she taught. For example, it is not necessary to teach the future perfect tense because it is never used. Yet, as you can see, I have used the future perfect tense in the first sentence of this farewell note. The point is that one has to be selective in life; there isn't enough time to do everything that one would like to do. At the same time, one shouldn't be too judgmental in one's selections. You never tell when the oddest scrap of knowledge may come in handy. One needs to have direction and focus in study, but one also needs to be experimental and playful. Before I became a teacher in Asia, I was leading a completely normal life in the United States. When I decided to accept an offer to teach in China, everyone thought I was crazy. It was a big risk to take, but I thought adventure was more important than security. The result is that my life is much more interesting than it would have been. My final advice to students is: don't always do what is expected of you. All of you are bright enough to recover from a failure, but if you succeed, you have a whole world of experience to gain.

Michael Lazarin, Ph. D.
Winter 1992

それから10年経ちました。私の考えは今も変わりません。年を取ると進歩が無いらしい。既に紙面オーバーですが、編集委員の許可を得たので、どうせ舌足らずですが、もう少し年寄りの愚痴を聞いて下さい。上記の要旨の解説の代りに、考え方を記します。それは戦前、戦中に育ち、戦後に考えるようになった私の40年来の哲学にのっております。

科学は真理の探求を目指しております。しかし、真理には人間の立ち入れない最後の線があるように思えます。それを神だけが知る宇宙の摂理と云ってもよいでしょう。たとえ人類を破滅に導くとしても真理は真理であると云う立場も認めましょう。しかし、人間の生存する限り、科学が人間を不幸にすることの無いように人類は努力すべく神の意志は働いていると私は信じます。そこで、真理の探求でない人類への貢献を目指す科学が存在し得るし、学問に対する社会のニーズと云う考え方も受け入れられることとなります。その時、科学者は自然とか歴史と云った研究対象に対して謙虚にならざるを得ないと思えます。真理探求が目標でないからと云って、学問の墮落ではありません。

最近、科学論は余りはやらないようです。そして、科学、特に自然科学の世界はいつの間にか論文製造工場と化しつつあります。それは科学者の傲慢に通じるものであり、その研究の成果は悪魔の科学となりましょう。総合科学と云う新しい学問分野にこそ、科学論は必要です。総合科学部の発展のために大いに論議していただきたいと願っています。

沼田研修で思ったこと

沼田研修で何をしたかという、1つにはコース選択について考えること、もう1つは友達を増やすことである。1つ目にコースについては、第1、第2志望のコースについてコース別ミーティングがあった他、用意して下さった資料の閲覧もできた。友達を作るといのは研修の全体を通じて出来ることだけれども、プログラムとしては、1日目の夜に懇親会があり、2日目には4種目に分かれてのレクリエーションがあった。

私は第1志望の地域文化コース、第2志望の社会科学コースの説明を受けたのだが、私の場合は地域文化コースのⅥ群（比較文化研究）と志望がはっきりしているの、第2志望については参考までに、という程度だった。

地域文化コースのミーティングでは各群についての説明や先生方の研究内容、卒論のテーマや就職等についての資料をいただき、全体で説明を受けたあと、各群に分かれて質問等をした。質問は活発に—というわけにはいかなかったけれど、何を質問していいのかわからないというのが正直なところで、それも仕方がないことのように思う。しかし1人1人が自分の持っているテーマを言い、それに応じて、それならばこの先生はこういうことを研究していच्छるだとか、別のコースとこのコースはこういうふうに違うのだとか具体的に教えていただいた。

社会科学コースでは、特に就職について力を入れて説明されたのが印象に残った。私が行ったのは第2志望のミーティングだったが、就職先に特に希望がある人は、社会科学コースにしたほうがいいだろうかと迷っている人もあったようだ。

資料他閲覧のコーナーでは、各コースの出しているパンフレットや論文、各先生方からの研究内容の紹介やメッセージ等を見ることができた。研修に参加しなかった人も一度見せてもらおうといいと思う。この分野に進みたい人が今しておくべきことなども書いてあっ

た。

懇親会では結局いつもの友達と話すことになったようだ、もっと詳しい話をききたい人は先生方と話こんでいたようだし、私も雑談ではあるが先生と話することができ、自分とは違ったものの考え方にふれることができたように思う。少し興奮もしたし疲れもした。

レクリエーションの日はよく晴れて暑すぎるくらいだった。私はテニスをしたが、球拾いに走りまわった—というべきか。

やっぱりこの研修には参加してよかったと思っている。勉強したいテーマ、将来のことなど、ずいぶん話したように思う。まだ焦点は定まらないにしても、皆自分のやりたいことを持っているんだという印象をうけた。何か持っているのだけれども、はっきりとつかみきれないといったところだろうか。自分自身についていえば、勉強したい方面はだいたい決めていてコース選択に迷いはないのだけれど、その先の就職に関しては全く保留してしまっている。他の人たちを見ると、自分の勉強したいことが複数のコースにまたがるので選択に困っている人、関連のうすい複数の分野に興味がある人、勉強したいことと将来つきたい職業とのギャップなど、いろいろな悩みを持っていることがわかった。

研修に参加して、本当に「勉強したい」と思った。実行に移しているのかといわれるとつらいけれど、とてもいい刺激になったし、友達と卒直に話せる機会にもなったと思う。

(文責 古田 智子)

ついに西条移転が……

今、広島大学は移転の過渡期である。もちろん総合科学部も移転する。でも、移転する移転すると言うだけで月日は流れ、現在総科移転は平成4年度末と言われている。(いったい何度延期になったことやら) さて、本当に今度こそ、移転するのだろうか、平成3年度総合科学部移転実施委員長である久保泉先生に聞いた。

・今、総科はどれくらい建設が進んでいるのでしょうか？

「研究棟、事務棟はできあがっています。一般教育棟も600人クラスの大講堂以外は4年度末までにはできます。」

・では、平成4年度末の総科移転は本当にできるのですか？

「はい、ほぼ間違いなく4年度末には移転は終了します。5年度からの授業は西条で行なわれます。」

・移転が完了するということは、学内の道路も整備が完了しているのですか？

「すでに移転した理学部の周りもまだですから……。」

・千田キャンパスでは1年生用や2年生の学生研究室がありますが、西条にもあるのですか？

「いえ、学生用研究室は用意していません。ただ、1、2年生向きとして、400人分のロッカーのある部屋があります。が、ロッカーがずらっと並んでいて、1組位のテーブルとイスがあるだけです。」

・現在の所では、車の通学者が多いそうですが、総科が移転したらどうなるのですか？

「今は学生数も少なく空地も多いので車で通学はできますが、これからどうするのかは大問題です。」

このように、総科の4年度末移転は本当らしい。西条キャンパスは広いだけに、工学部の教官に「ゆったりと教育、研究ができる。」と言わしめる「良さ」があると私も思う。でも、久保泉先生がおっしゃっていたように(あくまでも現時点では)交通の便が悪く、冬寒い、かの地において車の通学ができないかもしれないのは、学生としてすごく心配。

さて、心配と言えばもう一つ大事な心配事がある。それは下宿がどう確保できるかだ。そこで、千田キャンパスの生協不動産部にかがうと、とてもわかりやすい資料を用意してもらえたのでそれを後に示す。(ただし、全て平成3年9月末現在)

まず、部屋数は3年9月末現在で、4641室ということだが、総科が移転すると1万人弱の学生が西条に行くことになる。生協によると約8千の部屋が必要というから、あと3400室は足りないということだ。またこのうち2千室程は総科移転までに建設が予定されている。しかしそれでもまだ足りない。まだまだ学生用アパートの建設の必要があると思う。現に地元への建設のよびかけが行われているという。しかし、どうなることやら。



目下、工事中の総合科学部である

単身者向け広島市内のマンションと西条地区のアパートの比較表

	広島	西条	コメント
広さ	16m ² 程度	20m ² 程度	西条が広め
ゆか	フローリングと畳が半々	西条は寒いからか圧倒的に畳が多い	ジュウタン敷けば同じ
風呂	風呂とトイレがセットのユニットが多い	風呂とトイレが別々のセパレートが多い	西条の方が日本人向き
トイレ	洋式の水洗トイレが多い	「洋式や和式の水洗」か「汲み取り式の簡易水洗」	西条は下水道整備遅い
収納	60cm幅の押入	90-120cm幅の押入	西条が上!
洗濯	洗濯機置ける	洗濯機おける	同じ
エアコン	付いている	夏が過ごしやすいためか付いてない方が多い	広島が上!
駐車場	無いことが多いし代金1万円以上	市街地を除きほとんどある 代金〇円-3千円	この差は大きい
駐輪場	無いか、あっても狭い	広くて、まず困ることはない	西条が上

さて、部屋探しに幹旋先へ行くと、だいたいの部屋でも下記のようなものだ。

- ①風呂がある。
- ②トイレは本物の水洗じゃないかも。
- ③駐車場がほぼついている。
- ④間取は、1Kか1DK。

だいたいこんなもんだろう。なぜなら、①は西条には銭湯がないから必ずある。③は別に、土地が余っているからではない。指定下宿の基準に「戸数の半分」が最低必要とあるからだ。もっとも前の表を見ればわかる通り実際はほぼ戸数分ある。おまけに代金も安い。②はちょっとわかりにくいかも知れないが、こういうことだ。水洗というのは、汚水が浄化水槽で処理されるもので、下水道を通して公の集中浄化槽で処理されるものと、個々のアパートごとで処理される個別浄化槽のものがある。が、西条は下水道があまり普及していないので、後者のタイプがほとんどだ。次に、汲み取り式の簡易水洗は、自分の部屋のトイレは水洗と同じようでも、そのアパートの近くに留まって汲み取り業者が汲み取りにくる。この両者の違いは使用者にとってはたいした違いではなくても、近隣農家にとっては、汚水が田に入る危険のある個別浄化槽は問題でアパート・マンションを建設しても個別浄化槽設けることはできなかった。しかし、最近になってこのタイプの浄化槽整備ができるようになった所もあり、そういった所では今後の新築物件は水洗であると思う。最後に④は、学生が一番希望するタイプを、ということでこのタイプがメインの物件ということだ。そのため、広島で1万円位から選べる下宿も西条に行くと、新しく設備がいい上、同じような間取りだから、家賃も似たようなもんで、安い物件はなかなかない。

高いと思いつつも部屋を確保し、いよいよ西条の生活が始まる。すると店がない。キャンパス周辺には、今のところ

- ・田口のセブンイレブン
- ・下見のポプラ
- ・スーパーショウジ下見店
- ・他2~3軒

と、広島に住んでいる者には、少しさびしい。もっとも、八本松駅と西条駅間の国道2号線

沿いと西条駅周辺の市街地には、スーパーや食堂、飲み屋など色々あるので、たいがいはこの地区の店々をたよりにすることになる。

総科移転には、間に合わないだろうが、将来的にはキャンパスのすぐ北側の下見地区を学生街として整備する計画がある。どういった計画か具体的にはよく私は知らないまでも、学生向き、若者向けに下宿や商店街など整備していくというから、生活の便がよくなるのはこれからだろう。

こうしてみると、ボロい千田キャンパスを脱して西条に行っても、雨が降ったらぐちゃぐちゃのキャンパスに、高い家賃に少ない部屋数おまけに店も限られてくるし（もちろんバイトもだろう）といった学生生活面は、よくない。大学研究整備はいいものを持っているのだから、生活面の早急な整備に期待する。そうしてこそ、学習に没頭できるというものだ。



めったにこないバスを待つ学生の姿

西条生活記

教育学部心理学科2年 渡辺 亘

師走の薄青くて高い空と、遠くからとり囲む西条の山々にたくさんの学舎と学生がとけ込んでいくのを毎日のように見ていると、ここだけが何か特別な世界のような気もしてきます。間もなく総合科学部のみなさんが、西条人の仲間入りをされると考えるととても楽しみです。

心理学科のある教育学部の8階からは、工事中の総科がとても良く見渡せます。2つ並んだ8階建ての学舎は我が教育学部とよく似ており、外壁は他の学部とも同じの煉瓦色です。外観はほぼ完成しているようで、付設の施設も、工事が着々と進められているのが日毎に感じられます。

総科が西条へ移ることについて、みなさんはその利点を、いやな点が超越してしまって、喜ばしい感情をあまり抱いていないのではないのでしょうか。私は西条に越してきて間もないのですが、むしろその方が、良い点・悪い点を敏感に感じられるのではないかということで、この文章を書くことになりました。

西条に居を構えると、バイトに困る、足が不可欠、家がない、家賃が高い、店がない、遊べない、夏暑く冬は寒くて死ぬ、というような情報はもう既にみなさんにも届いているでしょう。全て疑いのない事実です。

しかし、一方で広島市内では決して得ることのできないものがあります。悔し紛れに言っているのではありませんが、それは自然です。朝の爽やかさはこの上なく、心が軽くなります。夕ぐれの日差しは限りなく赤に近く、西条には数多くある沼に映えます。最近まで赤トンボもたくさんとんでいました。個人的には、この時期の朝10時頃の田んぼが大好きです。

時にこれからの自然は、厳しく日常生活に立ちはだかってきますが…。

要は、西条での生活をいかに楽しむかということでしょう。広島市内に逆戻りした先輩も何人か知っています。人それぞれですか。でも、悪いところではないのは確かです。

これまた工事中の総合科学部



立ち並ぶ学生宿舎



体験レポート i n 西条

—編集部—

そして私は西条にやってきた。思ったより時間はかからなかった。(本学から友達に車に乗ってもらったのである。感謝♪♪) まともに西条キャンパスへ足を踏み入れるのは初めてである。うーん、やっぱでっかい。見渡す限りの広大な敷地に校舎が乱立。千田キャンパスの窮屈な、しかしどこか一帯化した安心感に慣れ親しんでいた私には何だか寂しく思ってしまった。出来たてほやほやの校舎を建て物としてしか見れない。まだまだ学校の顔をしていない。これからだなあ。さーて、んじゃ、我らが総合科学部へと参りましょう。

工事のおじさんが一生懸命頑張ってます。お疲れ様でーす。工事もう一息といった感じです。「ここかぁ…」 妙に感慨にふけったりする訳だが総科移転時にはもういないのねと思うと嬉しいやら、悲しいやら。すぐ隣には生協ができるとの事。うん、便利でよかった。

その後、まず学生宿舎へ向かった。友達の部屋へとあがらせてもらったのだがやはり狭い。畳4位であろうか。備え付けの本棚があるのだが却ってそれが幅をとっているという感じ。台所も電話も宿舎に一つなのだそう。こりゃあ困っちゃうよなあ。宿舎のコインランドリーのおじさんに出会った。皆の洗濯物がいつも散乱して困ると言っていた。「写真を撮らせて下さい」と頼むと「今日はこんな格好だから…。」と行ってやたら照れていたおちゃめなおじさん。でも結局写真はまともには撮れてなかった。おじさんごめんなさい……。それから我らは西条駅へと向かう。西条駅周辺はなかなかの都会。フジや大きな商店街があり人ゴミも多い。でも学生はここまでエンジン付きの乗り物なしでは辛いという事だ。うーん参ったね。駅のキオスクのおばさんに広大が出来た事についてどう思うか聞いてみた。「活気がでてきたし、いーんじゃない」という事だった。うーん、しかし周りの評判はこんな風に好意的なものばかりじゃないのであろうという事はしっかり肝に命じておかねばならないでしょう。現に広大生が来てからというもの、自動車事故等多発しているようだし……。

お一気がつけばもう真っ暗ではないか。いつのまにか西条も日が暮れてしまいました。それではと。スーパー・酒屋で買い物をし、おきまりの酒宴。カラオケとまいりましょうか。そして例によって例のごとくのドンチャン騒ぎで私の西条の夜は幸福に幕を閉じるのであった。うーん、いい気分♪♪

しかし今回の西条生活初体験では幸運にも友人の協力のお蔭でおいしい面しか見えないような気がします。毎日々々、様々な西条ならではの苦労がある事でしょう。それを体験せずして大きな事は言えませんが“気の持ちよう”で生活の楽しみ方も変わってくるのではないのでしょうか—という訳で皆さん、これからもそれぞれなりのキャンパスライフを自分自身楽しんでいこうじゃありませんか!!

ソクラテスの妻

中島 美紀

「あんた！いつまでゴロゴロしてるのよ。少しは外でちゃんと働いたらどうなの！」

ソクラテス家の朝には、このいつものクサンチッペの小言が欠かせない。

それに対してソクラテス家の御主人は聞いているのかいないのか、返事もせずに妻に背中をむけたまま。

「へえ、そっちがその気ならこっちにだって考えがあるんだからね」

肩をいからせたクサンチッペは寝ているソクラテスに近づくやいなや、その背中に怒りのキックをくらわせた。

「ウギャー!!」

一声さけぶとソクラテスはこれはたまらんということで早々に退散することにした。ボサボサ頭をかきつつ不平をたれ流しながら。

「わたしのうちなんだからいつまで寝てようがわたしの勝手じゃないか、ブツブツ」

しかしこれを耳聴くキャッチしたクサンチッペは、逃げ出すソクラテスの背中に向かって怒鳴りつけた。

「なんだってこの甲斐性なしめ！文句があるんならはっきり言ったらどうだい！」

迫力負けしているソクラテス家の御主人は、なさけなや転びまろびつ奥さんに家から追い出される羽目になってしまったのだった。

「まったく、毎日ろくに働きもしないでブラブラしてばかり。すこしは生活のことも考えてほしいもんだわ」

このように、台所をあずかる者としては苦勞のたえないクサンチッペの毎日だった。そのため、いつのまにか子供たちに対して口癖のごとく言うようになった言葉があった。

「いいかいおまえたち、父ちゃんみたいになるんじゃないよ」

ギリシャのアテナイに住むソクラテスはちょっとした有名人だった。

事のおこりは、彼の友人のひとりがデルフォイというところにある神殿におもむき、

「ソクラテス以上の賢者はこの世におりますでしょうか？」

とたずねたことにあった。

すると神さまは、

「ソクラテスは、あらゆる人々のなかで最も賢いやつじゃ、ほっほっほ」

とお答えなさったので、これを伝え聞いたソクラテスはおおあわて。

みずから賢者とは思えぬが、さりとて神がうそを言うとは信じられぬ。よし、それならいっちょ、やってみるか！というわけで、当時、賢者として評判の高かった人たちをたずね、問答を試みていったのだった。

こうして、みずからソフィスト（知恵者）と称して、

「わたしは何でも知っているから、金をもつてくれば何でも教えてやろう」

と言いふらしている連中に対して、

「わたしは何も知らない。ただ知っているのは、自分が何も知らないということだけだ」と言って論争をいどむソクラテスの生活がはじまったのだった。

しかし、この真実の知恵を愛し求める生活をクサンチッペは理解することはできなかった。

クサンチッペにとっては、ろくに働きもせずに、一日じゅう机のまえにすわりこんで物思いにふけったり、弟子たちを集めて何やらわけのわからないことを説いているだけの夫に、腹がたってしかたがなかったのだ。

ついこのあいだもこういうことがあった。ソクラテスが外から弟子とともに帰ってきたとき、クサンチッペが声をかけたにもかからわず、ソクラテスたちはふりむきもせずに、部屋にはいって何やら熱心に議論を始め出した。

「あんた、聞いているの？返事ぐらいしなさいよ。また、弟子なんかつれてきて。すこしはうちのなかのことも考えてっていつててでしょ！」

しかし、まったくソクラテスは耳をかさない。はらわた煮えくりかえつたクサンチッペは、ついに桶いっぱいの水をもちだした。

「おんどりゃああ、話を聞かんかああい！」さげびとともに、水をぐうたら亭主にぶっかける。

しかし、ずぶ濡れになってもソクラテスは平然として、

「いいかね、雷が鳴れば、そのあとで大雨が降るのは当然のことだから、気にすることはないんだよ」と弟子にまじめくさつて言うだけだった。

また、あるとき友人のひとりがソクラテスにこうたずねたことがあった。

「どうしておめえさんはあんなうるせえ女房と一緒にいられるんだい？」

ソクラテスこたえて曰く、

「フッフッフ、馬術に長じようとする者は、気の荒い馬をえらんで乗るはず。それはあばれ馬を乗りこなすことができれば、ほかの馬を御するのは簡単だからさ。うちのかみさんもあばれ馬のようなもんだから、あいつを耐え忍ぶことができれば、たいていの人間に対しても耐え忍ぶことができるようになるはずだ。つまり、クサンチッペを制する者は人類を制することができるというわけなんだよ。わかったかい？」

このように、ちょっと変わったソクラテスと年じゅう活火山のクサンチッペの夫婦は、ご近所でも有名だったが、この年、ついに歴史的に有名になってしまう事件がおこってしまったのだった。

世にいう「ソクラテス事件」である。

ソフィストたちと論争をつづけていたソクラテスは人心をまどわす危険人物として告発された。

そのときソクラテスはアテナイの法廷において「わたしは何も悪くない。これからも言動を改める気はないね」とばかりに堂々と自己の所信をのべたため、陪審員たちの心証を害し多数決で死刑を宣告されたのだった。

(くわしくは「ソクラテスの弁明」をどうぞ)

この結果にクサンチッペはおどろいた。

「ばかよ、なんて要領の悪いひとなの。その

場かぎりでもいいから素直に言うことをきいてればよかったのに。」

友人や弟子たちもおなじように考え、なんとか彼を助けるためにソクラテスに脱獄をすすめた。しかし彼は丁寧にその申し出をことわり、アテナイの国法にしたがい死をえらぶことを告げたのだった。

「なにかっこつけてるのよ！死んだらおしまいじゃないの。残されるわたしや子供たちはどうなるの。いつもいつも勝手なことばかりするんだから！」

クサンチッペは、幼い子供たちを連れてソクラテスのいる牢獄へと向かった。夫を説得できるのはもう自分しかないと考えたからだった。

しかし死刑執行日の朝は静かに訪れた。

クサンチッペの懸命な説得にもかかわらずついにソクラテスは自分の意志をまげなかったのだ。クサンチッペもなかばあきらめ、せめて静かに夫の死への旅立ちを見送ろうと心に決めていた。

しかし、夫の友人や弟子たちがソクラテスのところに最後の面会にあらわれたとき、その心のたがは、あっけなく吹き飛んでしまった。

「ああソクラテス！あんたが仲よしのみなさんと、こうして話ができるのも、もうこれが最後ののね！」

するとソクラテスは友人たちに目をうつして言った。

「すまないが誰でもいいから、これを家につれて行ってもらいたいのだが」

「待って、わたしなら大丈夫。心配しないでひとり帰れるわ」

そう言う妻の瞳を夫は見つめていたが、やがてポツリとつぶやいた。

「いままで苦労ばかりかけてすまなかつたな・・・」

一瞬、クサンチッペは体中から力が抜けていきそうになるのを感じた。しかし必死に自分をはげまして倒れるのをこらえた。

「いいのよ。苦労なんて。これからはぐうたら亭主がいなくなって、かえってせいせいするんだから」

くしゃくしゃの顔で夫にほほえみかけると夫はやわらかい苦笑をうかべて言った。

「それでこそ我が妻だ」

そしてすぐにクサンチッペから視線をはずすと、見守る弟子や友人たちに語りかけた。

「諸君、別れの時が来たようだ。おたがいにそれぞれの道を行こう。わたしは死の道へ、諸君らは生の道へ。いずれがよいかは神のみぞ知るだ」

こうして紀元前399年春、ソクラテスは毒杯をあおぎ、その生涯を終えたのだった。

ソクラテスの死への旅路を見送ったあと、どうやって家まで帰りつけたのか、クサンチッペはよく思い出せなかった。

夫の友人や弟子たちがつきそってくれたのかもしれないが、気がつくとき、子供たちをつれて家のなかにいたのだった。

もう何も考えることができなかった。空虚さだけが、いまのクサンチッペを支配していた。

子供たちは父親の運命など知る由もなく、いつものようにキャッキャッキャと狭い家のなかを走りまわっていた。

そんな子供たちの無邪気な姿を見ていると胸に締めつけられるような痛みが湧きあがってくるのだった。

ふと見やると夫の愛用していた机が目にとまった。

そのとたん、目のまえに、夫が机にほおづえをついて何やら考えこんでいる姿が見えたような気がした。

「あ、あんた」

思わず駆け寄ろうとしたクサンチッペは、そのまま机につっふしてしまった。

クサンチッペはすぐには自分が泣いていることに気付かなかった。感情が勝手にからだを動かしていたのだ。いつのまにか肩が大きく上下し始め、いまや彼女は子供のように泣きじゃくっていた。

「ソクラテスのばか・・・、あんたがいなくなったら、わたし、だれにむかって文句をいえばいいのよ・・・、お願い、またぐうたらでもいいからもどってきてよ・・・お願いよ・・・」

その後のクサンチッペと子供たちのことはよくは分かっていない。

だが彼女のことだから、子供たちを育てながらしっかりと生きていったにちがいない。

そして、そんななかで、もしかしたら例の口癖だけは少し変わったかもしれない。

そう、こんなふうには。

「いいかいおまえたち、父ちゃんみたいになるんじゃないよ・・・」

そして少し寂しげに少し誇らしげに付け加える。

「あんな意地っ張りな女泣かせのおとこにはね」

(終)

なお、この作品を書くにあたり、次の著作を参考にさせていただきました。

駒田信二 「世界の悪女たち」

田中美知太郎 「ソクラテス」